

## 一つの伝記論 (5)

安 達 肆 郎

目 次

序

一

二

三 利用された伝記

四 好事家の伝記

五 文学的伝記

六 歴史的伝記

七

八 自己目的・自足的伝記 (1)

九 自己目的・自足的伝記 (2)

十

十一

……本号

### 九 自己目的・自足的伝記 (2)

#### 1

ロランの変貌した「二つの主たる希い」を、彼が『ベートーヴェンの生涯』を書く原動力となった彼の「ベートーヴェン体験」とのかかわりの中に置いて、その光の下で見直し、「二つの希い」の元の姿と真相（その内容とそれが「ベートーヴェン体験」から生れ出る次第）を究明するのがわれわれの次の課題である。

便宜上、第一の希い（第二序文にあげた希い）から始めよう。

第二序文でロランは、『ベートーヴェンの生涯』は、「救済者にささげる感謝の歌」だという（先述）。つまり、救済者ベートーヴェンに感謝の歌をささげるのが、これを書いた自分の希いだという。

しかし、先述の様に、ロランは同じ序文のそのすぐ後で、「私のこの『ペー

トーヴェン』は、……（ベートーヴェンに対する）信仰と愛との証し（Les actes de foi et d'amour）であつた<sup>(1)</sup>といい、そのことを理由に、この『ベートーヴェンの生涯』は、音楽学のために書かれた著述でも「歴史学の厳密な方法に従った学問的な著述」でもない。総じて「この『ベートーヴェン』は、学問のために書かれたわけでは全然ない<sup>(2)</sup>」という。

してみると、ロランはここでは、『ベートーヴェンの生涯』を書いた自分の希いは、ただベートーヴェンに対する信仰を証しすることであつて、ベートーヴェンの音楽やベートーヴェンの事跡（歴史）を学問的に研究したり、その成果を示すことではない、といっているのである。

では、先に述べた「救済者に感謝の歌をささげる」というのと、「ベートーヴェンに対する信仰を証しする」というのと、何れがロランの希いの元の姿なのか——。先述したロランの「ベートーヴェン体験」の光の下でみてみよう。

先ず「救済者ベートーヴェンに感謝の歌をささげる」とは、傍観者的で、いかにもよそよそしい。ロランの先述した「ベートーヴェン体験（「出逢い」）」自体には、ベートーヴェンに対するその様によそよそしい姿勢は含まれていないから、そこからこの様な希いが直接に生れ出て来る筈がない。この様によそよそしい希いは、先に推量した様に、ベートーヴェンに対するロランの元の感銘が、歳月を経て風化した結果として生じたものに違いない。「ベートーヴェン体験」における、先述の様なロランの姿勢（ベートーヴェンそのひとに対する全人をあげての傾倒）からみて、「ベートーヴェンに対する信仰を証しする」ことこそロランの希いの元の姿であるに違いない。これこそ、原動力たる「ベートーヴェン体験」から直接に、また、初めて生れ出た希いに違いない。

次に、右の希いの真相(正体)を明らかにするために、(1)この希いは「ベートーヴェン体験」の光の下でみた場合、具体的内容的には如何なる希いなのか、また、(2)それはそもそも原動力となった「ベートーヴェン体験」からどの様に生れ出てきたのか、それを究明せねばならぬ。

先ず、ベートーヴェンに対する「信仰を証しする」とは、具体的にどうすることなのか——。

先ず、ここにいう「ベートーヴェンに対する信仰」は、——右の「希い」が『ベートーヴェンの生涯』を書く際のロランの主たる希いであり、従って、それはロランがそれを書く原動力となったものから直接生れ出た筈、ところが、その「原動力となったもの」は彼の全人をあげての「ベートーヴェン体験」であることを考えると、——ちょうどその「ベートーヴェン体験（出逢い体験）」以上以外のことを指す筈がない。即ち、「信仰」はここでは、ロランのベートーヴェンとの出逢い、即ちベートーヴェンそのひとに対する全人をあげての傾倒を指す。

では、「信仰を証しする」とはどうすることか——。「証しする」とは、一般に「事実を裏づけて明らかにする」ことであるから、ここにいう「信仰を証しする」とは、ベートーヴェンとの「出逢い」経験を裏づけて、それを確認（認）することであるに違いない。

ひとに出逢って、その「経験」を確認（認）する途はいろいろあろうが、ロランはいま、出逢った相手の「伝記」を書いて、それを確認（認）しようとしているのである。

結局、ここにいう「信仰を証しする」とは、ベートーヴェンの伝記を書いて（伝記を書くことにおいて）、ベートーヴェンとの出逢い経験を裏づけ、それを自分自身に確認（認）し、人にも示すことである。<sup>(3)</sup>

しかし、では、それは具体的にどうすることなのか——。『ベートーヴェンの生涯』の叙述の内容と叙述の仕方をみると、ロランの場合、それは、ほぼ次の様にすることであつたと思われる。

弱さも欠陥も悩みももった一人の生き身の人間ベートーヴェンの生涯にわたる生き方を述べ、その述べることに即して、全人を以て彼の生き方を辿り、それによって、その生き方を生きるベートーヴェンそのひとと再逢し、かくて、先の「ベートーヴェン体験（出逢い）」を裏づけ、それを自分自身に確認（認）、反芻する。

では、次に、「信仰を証しする」という希いは、原動力となったかの「ペー

トーヴェン体験」からどの様にして生れ出たのか——。

さて、ベートーヴェンに対する「信仰を証しする」ことが、具体的には右述の様なことを指すとする、それは畢竟、先述したベートーヴェンのおもかげを求めてする「ベートーヴェン体験」の確認、反芻の、いわば延長線上にあることがら、と思われる。

先述の様に、ベートーヴェンとの「出逢い」は、ロランにとっては突然の殆ど信じられない幸運な、且つその感銘を忘れ得ない痛切な体験であった。彼がその直後にパリを離れて、ベートーヴェンのおもかげに触れようとし、それによってその「出逢い」を裏づけ、それを自分自身に確証し、その「感銘」を反芻しようとしたのはそのためである（先述）。

しかし、ロランがこの時体験した「出逢い」とその痛切な感銘は、その様に、ただベートーヴェンのおもかげや作品に触れるだけで確認し、反芻し尽くされる底のものではなかった。そこで、彼は、更にすすんで、今度は「おもかげ」によるのではなく、直接生き身のベートーヴェンの全生涯にわたる生き方について、それを省み、それを迎えることによって、その生き方を生きるベートーヴェンそのひとに出逢い（再逢し）、かの「出逢い」とその感銘を直接、生のまま確認、反芻しようと希うに到るのである。

この様な「希い」は、ベートーヴェンとの出逢いとその感銘が、ロランの場合の様に、純粹で痛切な場合には、その出逢い経験から不可避的に生れるし、また、ロラン自身が認めている様に（先述）、出逢い経験から直接に生れ出る（その間に他の目的等々が介在する余地はない<sup>(4)</sup>）。

結局、ロランの変貌した「第一の希い」は、これを、原動力となった「ベートーヴェン体験」の光の下で見直すと、(1)元は「ベートーヴェンに対する信仰を証しする」という希いであったに違いない。また、(2)この「希い」は、ロランの「ベートーヴェン体験（出逢い）」から不可避的に且つ直接に生じた希いで、(3)その具体的内容は、ベートーヴェンの生涯にわたる生き方を述べ、それに即してその生き方を迎へ、その生き方を生きるベートーヴェンそのひとの魂の真実を全人を以て共感することによって、そこに立ち現れるベートーヴェン

そのひとに出逢い（再逢し）、かくて、原動力となった先の「ベートーヴェン体験（出逢い）」とその感銘を直接、生のまま確認、反芻しようとの希いであつたに違いない。<sup>(5)</sup>

2

次に、ロランの第二の希い（「第一序文」にあげた「悩める人々に救いと友を与える」という希い）を「ベートーヴェン体験」の光の下においてみてみよう。

さて、右の「希い」は、その内容から明らかな様に、ロランの社会主義的関心から生じたものと思われるが、<sup>(6)</sup>先述したロランの「ベートーヴェン体験」は、その様な社会主義的関心を含んではいないし、また、その様な社会主義的関心と直接のかかわりをもたぬ。

してみると、これはロランの本来の希いではなくて、先に仮説として述べた様に、当時の社会情勢に影響されて、本来の希いが変貌したものであるに違いない。

では、変貌以前の元の希いは如何なる希いであろうか——。上述の様な変貌の事情からみて、それは先ず、a. その内容、性格において、ロランの社会主義的関心（目的）と結合しやすい底のものであるに違いない（後述参照）。この様な内容、性格からすると、それは、「感謝の歌」に変貌した先の希い（ベートーヴェンへの「信仰を証しする」という希い）とは異なった、別のもう一つの主たる希いであるに違いない。b. しかし、これもやはりロランの「主たる希い」の一つとして、元はやはり、『ベートーヴェンの生涯』の原動力たる「ベートーヴェン体験」から生れ出たものに違いない。では、c. その「元の希い」は、具体的には如何なる希いであつたか——。また、d. それは、ロランの「ベートーヴェン体験」からどの様にして生れたか——。第二の希いの真相（正体）を明らかにするために、次にそれを考察せねばならぬ。便宜上、二つの問い（c、d）を併せて次に考察しよう。

3

後年、ロランは一つの手紙で次の様に述べている。「……1816年から1827年迄のベートーヴェンの危機に書かれた作品は、私にとって恐らく最も親近な作

品である。それらは最も緊密に私の日々へ編みこまれている。……私は、これらの作品に向って問いかけることをやめなかった。これらの作品は私に答へつづけることをやめなかった。だから、これらの作品が私に打ち明けたところを、他の人々に伝達しなければならない特別の義務を私はもっている<sup>(7)</sup>と。

これは、ロランがベートーヴェンの音楽へ全面的に心酔した際の心情を述べたものであるが、ロランがベートーヴェンそのひとと出逢った時の心情は、性格上、これと類比的(analogisch)なものだったのではないか——。

「ベートーヴェンそのひととの出逢い」は、先述の様に、ベートーヴェンそのひとが、自己(ロラン)の存在そのもののうちへ融けこむことで、逆にいえば、ベートーヴェンそのひとを自己のうちに担い、そこから根底的に揺り動かされることであるが、この様なひととひとのかかわりが、それ自体としては、右述したベートーヴェンの音楽への心酔の様な、作品とひとのかかわりとは異質であり、人間の体験としても、その深さにおいて後者(「心酔」)を超えることはいうまでもない。

しかし、それにしても、ひとに対する全人をあげての傾倒(出逢い)と作品に対する全人をあげての心酔とは、その性格において類比的であり、従ってまた、そこから生れる当事者の心情も、その性格において類比的であるに違いない<sup>(8)</sup>。

そこで、ベートーヴェンそのひととの出逢い(「ベートーヴェン体験」)によってロランのうちに生じた心情を、右の手紙に示されたロランの心情になぞらえていえば次の様になろう。「私は、ベートーヴェンそのひとに出逢って、魂をゆるがす底の深い感銘を受け、以来、私はいつも彼を心のうちに担っている。だから、私は出逢ったベートーヴェンそのひとから受けた感銘を、他の人々にも伝えねばならぬ。或いは、——この場合の感銘(全人をあげての全人に対する感銘)と「ひと」とは不可分であるから——、出逢ったベートーヴェンそのひとを、他の人々にも伝えねばならぬ。そうする特別の義務が私にはある。」

「ベートーヴェン体験」におけるロランの心情を右の様に解してよければ、われわれはそこから「第二の希い」の元の姿を次の様に復原することができる。

先ず、右の「特別の義務感」は、「ベートーヴェン体験」に基づいて、ロランが『ベートーヴェンの生涯』を書く際には、筆者の立場におきかえられて、筆者の強い希いとなるに違いない。しかも、「ベートーヴェン体験」は、彼が『ベートーヴェンの生涯』を書く原動力であるから、右述の様にそこから直接、不可避的に出たその希いは、主たる希いとなるに違いない（後述参照）。

しかし、問題はその「主たる希い」の具体的内容である。

さて、前述した「作品」への全面的心酔の場合、ロランがそこからえたものは教訓であった。しかし「出逢い」によってロランがえたのは、ただベートーヴェンそのひとへの共感（感銘）であって教訓ではない。<sup>(10)</sup>従って、この場合ロランの「義務感」の内容は、えられた教訓を人々に伝えることではなくて、自らが全人をあげて感銘したベートーヴェンそのひとを他の人々に伝えることである。自分がベートーヴェンそのひとから受けた感銘を他の人々に同感させ、ひいては、ベートーヴェンそのひとを感銘させることである。『ベートーヴェンの生涯』の叙述の仕方に即して更に具体的にいえば、自分が感銘したベートーヴェンの生涯の生き方を述べることによって、そこに自ら現れるベートーヴェンそのひとを人々に感銘させること、よりの確に順序だてていえば、右の「叙述」にこめられた、ベートーヴェンそのひとに対する自分の感銘を他の人々に同感させ、ひいては、人々をベートーヴェンそのひとへの傾倒に到らしめることである（後述第十二、第十四章参照）。

これは正に、ひとをひとに伝えることであって、教訓を伝え、徳を讃え等々することではない。とまれ、これが前述したロランの第二の「主たる希い」の内容となるに違いない。

結局、先のロランの「特別の義務感」は、「ベートーヴェン体験」に基づいて彼が『ベートーヴェンの生涯』を書く際には、筆者の立場での希いにおきかえられて、ベートーヴェンそのひとを他の人々に伝えるという内容の、強い主たる希いになるに違いない（注意すべきは、この希いの内容は、変貌した第二の希いの内容＜ベートーヴェンという人を人々に与える＞と表面上同じであることである）。

さて、右のロランの希いこそ先述したロランの変貌した「第二の希い」の元

の姿に違いない。というのは、先述の様な「特別の義務感」からおきかえられた「希い」は、それ自体は純粹で、「何のために」という目的をもたないが（後述参照）、却ってそのために、全く異種の源泉から生じた「目的」とも結合しやすい。この場合も、ただ「ベートーヴェンそのひと」を他の人々に伝えたというロランの純粹な希いは、その内容が表面的には同じであるために、——それにひきずられて——「苦悩する人々に支えと友を与えるために」という彼の社会主義的関心から生じた「目的」とごく自然に結合して、先述した「第二の希い」の様に変貌した、と思われるからである。

では次に、右の様な「第二の希い」の元の姿（その源となった彼の「特別の義務感」）は、「ベートーヴェン体験」からどの様にして生じたのか——。

われわれはここでも、前述したベートーヴェンの作品へのロランの心酔の場合を手掛りにしてそれを推量することができる。ロランはその「心酔」の際の心情に関連して、次の様に語っていた。「……私は作品に向って問いかけることを止めなかった。作品は私に答えつつけることを止めなかった。だから、作品が私に打ちあけたところを他の人々に伝達せねばならぬ特別の義務を私はもっている」（前述）と。

右の「だから」は何を意味するか——。この言葉を、「理由」を示すものと解して、その間に他の言葉が省略されているのだ、と解することもできよう。しかし私は、この言葉をそのまま受け取り、ロランが「心酔」と「義務感」とを直接、不可分につなぐ自らの特殊な心情を率直に表明したものと解する。即ち「だから」は「理由」を示すのではなく、当事者の心情においては「心酔」と「特別の義務感」とは不可分に結合していて、その間に「理由」や「目的」等が入り込む余地はなく、後者は前者から直接にまた、不可避的に生じることを示しているものと解する。もし、この様に解してよければ、「心酔」と「出逢い（傾倒）」との前述の様な性格の類比に鑑みて、「出逢い」と先述した「義務感」（「第二の希い」の元の姿）との間にも同様の関係を想定してよいのではないか——。即ち、右の「義務感」（「第二の希い」の元の姿）と「出逢い」経験とは、当事者ロランの心情においては不可分で、その間に何等かの「目的」



や「理由」等が入り込む余地はなく、前者は後者から直接に且つ不可避的に生じる、「出逢い」経験が純粹で痛切であれば、当事者は右の「義務感」を免れることはできない、と。

ロランの場合、ベートーヴェンとの出逢い（「ベートーヴェン体験」）は、彼の魂の救済となり、彼が「生との新しい貸借契約」<sup>(11)</sup>を結ぶ原因となったが、この様に痛切な「出逢い」経験は、右の「義務感」を免れることはできない。

結局、前述したロランの「義務感」（「第二の希い」の元の姿）は、ロランの「ベートーヴェン体験」と不可分で、そこから不可避的に且つ直接に（「目的」等を介さず、それと結合せずに）生じたと考えられる。

以上の様に解してよければ、ロランの「第二の希い」の元の姿は、自分が全人をあげて傾倒した（出逢った）ベートーヴェンそのひとを、他の人々にも伝えたいとの希い、伝えねばならぬという一種の義務感である。<sup>(12)</sup>

そして、それは、もと原動力となったロランの「ベートーヴェン体験」から直接に且つ不可避的に生じた希いである。

「二つの希い」の元の姿とそれの真相（正体）がこの様なのだとすると、次に両者の関係とその真相如何が問題である。

さて、「二つの希い」は右にみた通り、ロランの場合、何れも、もと同じ一つの根（「ベートーヴェン体験」）から直接に不可避的に、しかし別々に生じたのである。といっても、ロランの「ベートーヴェン体験」は、「出逢い」という純粹な経験であるし、二つの希いはそれと不可分であるから、「ベートーヴェン体験」が二つの希いとは別の、それらを媒介結合している高次の第三者（理念）、或いは二つの希いを手段とする高次の目的や狙いであるわけではない。それ故、ロランの場合、二つの希いは、各々独立した、また、更にその理由や根拠や目的をあげることでない、「ベートーヴェン体験」の事実（或いは「出逢い」の事実）という他はない。

しかし、「二つの希い」は、それを達成するために筆者（ロラン）がなさねばならぬ操作（作業）としては、——少なくとも外形的には——一つに帰着す

る。即ち、ベートーヴェンの生涯の生き方を記すこと（「伝記」を書くこと）に帰着する。

というのは、ロランは一方では、ベートーヴェンに対する信仰を証しすること、即ちベートーヴェンそのひととの「出逢い」を確認することを希い（第一の希い）、他方、自分が出逢ったベートーヴェンそのひとを他の人々にも伝えようと希う（第二の希い）が、ここにいう「確認」は、前述の様に、ロランの場合、具体的には、ベートーヴェンの生涯の生き方を述べる（迎える）ことにおいて（そのことに即して）、そこに現れるベートーヴェンそのひとと再逢すること、また、出逢いの感銘を反芻することであり、他方、ここにいう「他の人々への伝達」は、前述の様に、ロランの場合、ベートーヴェンの生涯の生き方を述べることによって、これを読む人々に、そこにこめられた筆者自身のベートーヴェンそのひとに対する感銘を同感せしめること、ひいては、人々をベートーヴェンそのひとへの傾倒に到らしめることであるからである（後述第十二、第十四章参照）。

結局、ロランが『ベートーヴェンの生涯』を書いた元の「二つの希い」は、独立した別々の希いではあるが、しかしその根（「ベートーヴェン体験」）を同じくするばかりでなく、ロランの場合、それを達成するための筆者の実際の操作においても、少なくとも外形的には、「ベートーヴェンの生涯の生き方を述べる（「伝記」を書く）」という同じ一つの操作に帰着する（後述第十二、第十四章参照）。

4

さて、前章（第八章）の冒頭に述べた様に、われわれの当面の課題は、「自己目的・自足的伝記」といえる様な伝記の実例を見出すことである。いままでロランの『ベートーヴェンの生涯』について、筆者ロランがそれを書く原動力となったものや「主たる希い」の元の姿やその真相を究明してきたのは、『ベートーヴェンの生涯』が果たしてその様な伝記（「自己目的・自足的伝記」）の実例といえるか否かを検討するための準備である。次に、右述した「主たる希い」の元の姿とその真相を手掛りに、その「検討」にとりかかろう。

便宜上、「検討」を次の二段に分け且つ各段で検討すべき問題点を、形式的

になることを恐れずに、できるだけ絞ってみよう。

(1) ロランの『ベートーヴェンの生涯』は、自己目的<sup>13)</sup>的伝記といえるか否か——。

(2) ロランの『ベートーヴェンの生涯』は、自足的<sup>14)</sup>伝記といえるか否か——。  
さて、第一段で検討すべき問題点は、要するに、「伝記を書くこと」と、前述したロランの「主たる希い」との関係にかかわる。詳言すれば、前述の様なロランの「主たる希い」が、果たしてベートーヴェンの「伝記を書くこと」のうちに含まれるか否か、である。もし、そのうちに含まれておれば、ロランは『ベートーヴェンの生涯』を書く際に、「伝記を書くこと」以上、以外の希いをもたなかったことになる。このことを表返していえば、ロランは『ベートーヴェンの生涯』を書く際、ただ「伝記を書くこと」そのことだけを目的として書いた、そういう意味で、ロランの『ベートーヴェンの生涯』は、「自己目的<sup>15)</sup>的伝記」である、ということになる。

さて、右の「問題点」を検討するために、いま、その「関係」が問われている双方（「伝記を書くこと」とロランの「主たる希い」）の内容を確認しておかねばならぬ。まず、「伝記を書くこと」の内容を、ここでは、「伝記(Biography, Biographie, —Biographia)」という言葉の原義に従って、「人の生涯を記すこと(bios-graphein)<sup>(13)</sup>」としておく（後述参照）。次に、先述したロランの「主たる希い（第一の希い）」の内容は、これを要約すると、前述の様に「ベートーヴェンそのひとへの信仰を証しすること」、即ち「ベートーヴェンの生涯にわたる生き方を辿って、その生き方を生きるベートーヴェンそのひととの出逢いを確認すること」である（前述参照）。

さて、ベートーヴェンの「生涯を記すこと（「伝記」を書くこと）」は、それ自体としては、右述したロランの希いの内容とは別のことであるが、しかし、ロランの『ベートーヴェンの生涯』の場合の様に、筆者が主人公そのひとへの全人をあげての傾倒に基づいて彼の生涯を記す際には、それは——先述（3節等参照）の様に——筆者自身の心情においては、同時にベートーヴェンの生涯の生き方を辿って、それを生きるベートーヴェンそのひとを共感する（そのひとと出逢う）ことであって（前述参照）、ただ事実を事実として記しているわ

けではない。

この際、筆者ロランは、「生涯を記す」ことの半面で、いつもそれを生きるベートーヴェンそのひとと出逢い（再逢し）、彼との「出逢い（「ベートーヴェン体験」）を確認」し、その感銘を反芻しているのである。だから、「生涯を記す」ことと、ベートーヴェンとの「出逢いを確認すること」とは、ことがらそれ自体としては別々の事とはいえ、筆者ロランの心情においては、両者は不可分で、後者は前者の半面である。むしろ、後者は前者のうちに、その半面（或いは裏面）として含まれる。そして、筆者ロランの意識においては、ベートーヴェンに対する「信仰を証しする（出逢いを確認する）」ことは、即ち「彼の生涯を記す」ことであり、逆に、ベートーヴェンの「生涯を記す」ことは即ち彼との「出逢いを確認する」（信仰を証しする）ことであって、両者は別々のことではない。いわんや、その中の一方が他方の手段として意識されることはない。

結局、この場合の様に、筆者が主人公そのひとへの全人をあげての傾倒に基づいて彼の「生涯を記す」際には、筆者は、そのこと自体を目的とし、それ以上、以外の目的や狙いをもってはいないの<sup>(14)</sup>である。

次に、ロランの「第二の主たる希い」の内容は、要するに、「自分が感銘したベートーヴェンそのひとを他の人々に伝える」ことであるが、そのことと「伝記を書くこと」（ベートーヴェンの「生涯を記すこと」）との関係はどうか――。

さて、「ひとの生涯を記す」ことは、当然それが他の人々に伝わることである。ひいては、生涯の主が他の人々に伝わることである。殊に、ロランの『ベートーヴェンの生涯』の様に、筆者の全人をあげての主人公への傾倒に基づいて、彼の「生涯が記される」場合には、その叙述には筆者の主人公そのひとに対する感銘がこめられるから（前節参照）、それによって結局は、「生涯の主」（主人公）そのひとが他の人々に伝わることになる（第十二、第十四章参照）。

結局、この場合の様に、筆者が主人公そのひとへの全人をあげての傾倒に基づいて彼の「生涯を記す」際には、ひとの「生涯を記す」ことは、その生涯の

主そのひとを他の人々に伝えることと不可分で、そのことを内含している。ロラン自身の意識においても、「ベートーヴェンそのひとを他の人々に伝える」ということは、即ち、感銘をこめて「ベートーヴェンの生涯を記す」ことに他ならず、そのことの内に含まれた、いわば内在目的である。或いは内在する希いである（後述第十四章参照）。

右の二つの検討の結果、次の様にいうことができる。

ロランの二つの主たる希いは、——ことがら（希いの内容）としても、ロラン自身の意識においても——、何れもベートーヴェンの「生涯を記すこと」の外に出ることはない、そのうちに含まれている<sup>(15)</sup>、と。

それに、ロランの「主たる希い」は、前述の様に、何れもロランの「ベートーヴェン体験」から直接且つ不可避的に生れた希いで（先述）、その間に他の目的や狙いが入り込む余地はない。また、前述の様に、原動力となった「ベートーヴェン体験」自体は、ロランにとっては一つの事実（出逢い経験）であって高次の目的や狙いであるわけではないから、ロランの「二つの主たる希い」自体がロランの何等か他の目的や狙いに、また更に高次の目的に従属するわけではない。

してみると、結局、（先の検討の結果と併せていえば）ロランは『ベートーヴェンの生涯』を書く際には、ただベートーヴェンの「生涯を記す」こと以外、以上の目的をもたぬ。換言すれば、ロランはただベートーヴェンの「生涯を記す（伝記を書く）」ことのみを目的としていたといえることができる。ロランの『ベートーヴェンの生涯』は、そういう意味で「自己目的伝記」である（後述＜6 節参照＞する様に、右に検討した諸点については、一般に、主人公そのひとへの筆者の全人をあげての傾倒に基づいて書かれた伝記は、ロランの『ベートーヴェンの生涯』と同じ特質をもつ。それ故、一般に、主人公そのひとへの筆者の傾倒に基づいて書かれた伝記は自己目的伝記である、といつてよい）。

伝記」といえるか否か、である。ここで検討すべき問題点は、要するに、罗兰の『ベートーヴェンの生涯』が、他の「目的」、「狙い」、「好み」等とのかかわりに俟つことなく、それだけで、それ自体が独立して、従って直接に（他の「目的」、「狙い」、「好み」、「感情」等を介さずに）筆者にとっても読者にとっても独得の充実した意味をもつか否かである。

さて、罗兰の『ベートーヴェンの生涯』は、先に分類してきた諸種の伝記の様に、他の何等かの条件（「目的」、「狙い」、「好み」等）を俟って始めて（例えば、他の「目的」の手段として始めて）意味や意義をもち得る底の伝記ではない。先述の様に、それは筆者罗兰の「ベートーヴェン体験（出会い）」を原動力として、そこから直接に（罗兰の他の「目的」や「狙い」等を介さずに）生れたもので、それだけにそれは、それだけ独立して、また直接筆者罗兰そのひと（全人）にとって、即ち彼の魂に対して重い意味をもつものであった。ベートーヴェンそのひとに対する信仰の証し（全人をあげての「出会い」の確認）という重い充実した意味をもつものであった。

『ベートーヴェンの生涯』はまた、後述する様に読者に対しても、それだけ独立して、直接彼等の魂に呼びかけ、彼等の魂に対して充実した意味をもちうるのである。即ち、先に触れ後に詳述する様に、読者は、この伝記から直接に（自分の「目的」、「好み」等を介さずに）自分の全人を以て、そこにこめられた筆者の感銘（ベートーヴェンそのひとに対する感銘）を同感し、その際筆者のベートーヴェンそのひとに対する信仰を、いわば「同感の暈」として感得し、それを機縁として自らもベートーヴェンに対する信仰に到ることができるのである（後述第十四章参照）。

結局、罗兰の『ベートーヴェンの生涯』は、自足的伝記である。

以上、二段に分けて検討した結果、われわれはいまや、罗兰の『ベートーヴェンの生涯』は「自己目的・自足的伝記」の一つの実例である、ということができる。<sup>(16)</sup>

以上、われわれは、ロマン・罗兰の『ベートーヴェンの生涯』が「自己目

的・自足的伝記」であることを確認した。しかし、ここで二つの疑念が生じる。先へすすむ前に、先ずその「疑念」を省みておこう。

「疑念」の一つは、主人公との出逢い経験に基づいて書かれたロランの『ペーターヴェンの生涯』が、「自己目的・自足的伝記」となる、というわれわれの以上の考察が、もしかしたら、誤ってはいないかという疑念である。

もう一つの疑念は、仮に、ロランの『ペーターヴェンの生涯』についてのわれわれの考察には誤りが無いとしても、そもそも、ロランの『ペーターヴェンの生涯』の様な自己目的・自足的伝記は、「伝記」としては例外ではないか、との疑念である（ひととひとの出逢いは稀である。「出逢い」を原動力とする伝記は更に稀である。そこで、右の様な疑念が生じる）。

さて、われわれは他の機会に、クセノボンが書いた『アゲシラオス』伝が、ロランの『ペーターヴェンの生涯』と同じ様に、主人公との出逢い経験に基づいて書かれた「自己目的・自足的伝記」であることを確認している（前出拙稿、「伝記者のこころ」第2章及び前出拙稿、「伝記作者クセノボンの経験」参照）。

さて、右述したクセノボンの『アゲシラオス』伝は、これをロランの『ペーターヴェンの生涯』と対比してみると、——重複をさけるため、その詳細は省略するが——次の4点で、ロランの『ペーターヴェンの生涯』と（程度、それの現れのかたちの違いはあれ）同じ特徴をもっている。前後したが、その「特徴」を次にあげてみよう。a. 伝記が書かれる原動力となった筆者の体験（それが、主人公との「出逢い」体験であること）。b. 主人公に対する筆者の関心、態度（それが、全人をあげての「傾倒」であること）。c. その伝記に対する人々（読者）の関心（それが極めて強いこと）。d. 筆者と読者とのかわり（それが、主人公に対する筆者の「傾倒」に対する読者の「同感」であること）。（前出拙稿、「伝記者のこころ」第2章及び「伝記作者クセノボンの経験」参照。特にc、dの特徴に関しては、その第8章参照）。

この様な「類似」を如何に解すべきか——。クセノボンの『アゲシラオス』伝とロランの『ペーターヴェンの生涯』とは、筆者も主人公も、書かれた環境

も時代も異にし、ただ「自己目的・自足的」であることと右述した諸特徴以外は共通点をもたない。してみると、右述した両者に共通する諸特徴は、両者がともに「自己目的・自足的伝記」であるための必須の条件(a、b)であるか、もしくは、そのことの結果として生じた(c、d)と解する他はない(何れにせよ、右述した諸特徴は、一般に「自己目的・自足的伝記」の特徴と解してよい。以下の諸考察において、われわれは、右の諸特徴をその様なものとして取り扱う)。

とまれ、クセノポンの『アゲシラオス』伝とロランの『ベートーヴェンの生涯』との以上の対比によって、われわれは、先述した二つの疑義から解放される。ロランの『ベートーヴェンの生涯』の様な「自己目的・自足的伝記」は例外ではないし、『ベートーヴェンの生涯』を「自己目的・自足的伝記」とみたのは、われわれの思い違いではない。同じ特徴(「主人公との出逢い経験に基づいて書かれた」という特徴)をもった、また、その特徴の故に自己目的・自足的伝記となった、「自己目的・自足的伝記」の実例が、他に、少なくとも、もう一つ存在するからである(前出拙稿、「伝記者のこころ」序、参照)。

## 十

以上、第八、九章において、「自己目的・自足的伝記」の実例とみえる伝記をとりあげ、それが、みかけばかりでなく、実質的に「自己目的・自足的伝記」であることを確認し、また、二つの実例を対比して、「自己目的・自足的伝記」一般の特徴をも明らかにしたが、この様に、「自己目的・自足的伝記」の存在が確認され、その実例が見出されたことによって、小論第二章以来のわれわれの探究(「主人公に対する伝記者独得の関心」の存在を確認し、その所在を確かめるための探究)は、その目的を一応達成して終わったことになる。というのは、ここに見出された「自己目的・自足的伝記」の実例のうちこそ「主人公に対する伝記者独得の関心」は存在するに違いないからである。どうしてそういえるか——。先にも触れたが、念のため、その次第を次に示そう。



a. 「自己目的・自足的伝記」の筆者は、ただその伝記を書くことだけを目的とし、ただ伝記を書くことだけを希い、ただ伝記を書くことだけを狙っている。だから、「自己目的・自足的伝記」を書いている限り、筆者は純粋な伝記者であり、彼の「目的」、「希い」、「狙い」の基となった彼の立場は伝記者の立場である（われわれが先に検討した他種の伝記の筆者の様に、伝記を書いてはいるが、その立場は、文学者、歴史家等々の立場である、という様なことはない）。

b. してみると、「自己目的・自足的伝記」の実例における「主人公に対する筆者の関心」は、これを、純粋に伝記者の立場に立つ伝記者の、つまり、伝記者独得の関心といってよい。

われわれが探しもとめてきた「主人公に対する伝記者独得の関心」は、われわれの幻（空想）ではなくて存在するのである。「自己目的・自足的伝記」の実例のうちに実在するのである。

では、それは如何なる関心であるか——。後の問題とも関連があるので、次に、「自己目的・自足的伝記」の実例の一つ、ロマン・ロランの『ベートーヴェンの生涯』についてそれをみてみよう。

さて、『ベートーヴェンの生涯』における筆者ロランの主人公ベートーヴェンに対する主たる関心は、ロランがそれを書く際の「主たる二つの希い」のうちに含まれている筈。前述の様に、「二つの希い」は、ロランが『ベートーヴェンの生涯』を書く原動力となった彼の「ベートーヴェン体験」から直接に生れ出た希いであって、いわば、そこに含まれたロランの「関心」の焦点であるからである。

さて「二つの希い」の中、第一の希いは、主人公の生涯の生き方に即してそれを辿ることによって主人公そのひととの出逢いを確認し、その感銘を反芻することである（前述）。この希いは、ただ主人公の「生涯を記す（伝記を書く）」ことに含まれた内在目的である（前述）。そして筆者はそれ以外に伝記を書く「目的」をもたぬ。そこで、この際、筆者にとって主人公は形式的にはただ

「生涯の主」に他ならぬ（それ以外に、例えば、道徳上の模範、歴史上の重要人物等々ではない）。つまり、筆者の主人公に対する関心は、形式的には、ただ「生涯(bios)の主」に対する関心にすぎない。

次に、この場合ロランにとってベートーヴェンは、彼の生き方に即して、彼そのひととの「出逢い（傾倒）」を確認（反芻）すべきひと（全人）である。換言すれば、この場合、ロランの主人公に対する関心は、内容的には、主人公そのひと（全人）に対する感銘（傾倒）である（主人公の一側面に対する関心——例えば、彼の道徳的人格に対する尊敬——ではない）。

また、この場合筆者の主人公に対する関心は、外在する目的等によって媒介されず、直接主人公そのひとに向けられるから、外在目的等によって制限され弱められることはない。即ち、この際の関心は性格的には主人公そのひと（全人）に対する筆者の全人をあげての強い深い感銘（傾倒）である。

ロランの第二の希いは、主人公の生涯を記して、自分が感銘した主人公そのひとを他の人々にも伝えることである。この希いも「生涯を記す（伝記を書く）」ことに内在する目的である（前述）。そこでここでも、筆者の主人公に対する関心は、形式的にはただ、「生涯の主」に対する関心である。また、内容的には、その生涯の生き方によって他の人々にも伝えられるべきひと（全人）に対する感銘（傾倒）である。そして性格的には、外在目的等によって制限され弱められない主人公そのひとに対する筆者の全人をあげての強い深い感銘（「傾倒」）であり、しかも、そのひとを他の人々にも伝えねばならぬという一種の義務感でもある（先述）。

以上を総括すると、『ベートーヴェンの生涯』における筆者ロランの主人公に対する関心は、1. 形式的には、ただ、そこに記す「生涯」の主に対する関心であり、2. 内容的には主人公の一側面に対する関心ではなくて、主人公そのひと（全人）に対する感銘（傾倒）であり、3. 性格的には、主人公そのひとに対する筆者の全人をあげての強い深い感銘（傾倒）であり、また、一種の義務感でもある。畢竟、主人公そのひとに対する深い感銘に裏打ちされた（それを内容とする）「生涯の主」に対する強い深い関心である。

以上、ロランの『ベートーヴェンの生涯』についてみてきた「主人公に対す

る筆者の関心」は、独りロランの関心であるばかりでなく、一般に「自己目的・自足的伝記」における筆者の関心であり、それ故、一般に主人公に対する伝記者独得の関心である（前述参照）。

しかし、「独得の関心」が、筆者自身によってどの様なものとして意識されていたか、は必ずしも一様ではない。筆者によって異なる。

一例として、『ベートーヴェンの生涯』の筆者ロマン・ロランには、その「独得の関心」が如何なるものとして意識されていたかをみておこう。

それを明らかにするには、右の「独得の関心」を、それが生れた源泉へ戻してみればよい。さて、先述の様に、ロランの「二つの希い」は、ロランの「ベートーヴェン体験」から直接生れ出たもので、ベートーヴェンとの出逢い<sup>（1）</sup>の事実というべきものであった。とすると、その「二つの希い」に含まれていた右述の「関心」が、ロラン自身によって如何なるものとして意識されていたか、と問うことは、その「出逢い」におけるロランのベートーヴェンに対する独得の心情が如何なるものであったか、を問うことに他なるまい。ところがロランは、その「出逢い」における「ベートーヴェンに対する自分の心情」を、ベートーヴェンに対する信仰<sup>（1）</sup>と呼ぶ。また、ある場合にはこれを一般化して「人生と人間とに対する人間的信仰」<sup>（2）</sup>と呼ぶ。けだし、ロランは出逢いにおけるベートーヴェンに対する自らの独得の心情が、その性格において信仰者の心情に類すると考えたからであろう。或いはむしろ、若い頃キリスト教信仰を失った彼自身がベートーヴェンそのひとに対する人間的信仰のうちに生きていたから<sup>（3）</sup>であろう。とまれ、前述したロランの「関心」の正体（生の姿）は、ベートーヴェンに対する「人間的信仰」だったのである。

## 十一

「自己目的・自足的伝記」の存在が確認され、その実例が見出されたということは、ただ「主人公に対する伝記者独得の関心」の存在とその所在（ありか）が確かめられたというだけのことではない。

そのことは、また、更に窮極的には、われわれが小論第一章（3、4節）で提起した、「本来の伝記に関する三つの基本的問い」を解明するための有力な

手掛りが見出されたことを意味する。

どうしてそういえるのか——。次にその次第を示そう（次の叙述は結局、小論第一章3、4節、第七章2節等ていしば机上で予想したことがらを、小論三章以下、特に八章、九章での探究によって確認した事実によって確認したものに他ならぬ）。

1. 先ず「主人公に対する伝記者独得の関心」を含む「自己目的・自足的伝記」の実例は、「本来の伝記」の実例である。何故か——。

a. 「自己目的・自足的伝記」の筆者は、先述の様に（小論第七章2、3節）、伝記を書く際に、種々の「目的」、「好み」、「狙い」から離脱し、独立して、ただただ伝記を書くことだけを目的とし、ただそのことだけを希い、ただそのことだけを狙っている。いわば、純粋な伝記者になっている。

だから、彼の立場は、「伝記を書くこと」以外の「目的」、「好み」、「狙い」等と結合した他種の伝記（総じて他種の叙述）の筆者の立場（文学者、歴史家、教育者、好事家等々の立場）から切り離され独立した、それらと異なった伝記者独得の立場である（前述参照）。

b. 上のことを逆にいえば、次の通りである。即ち、「自己目的・自足的伝記」の筆者の立場は、「伝記」の筆者が、他種の「目的」、「好み」、「狙い」等々にとらわれそれと結合し、それに従属する以前の、もともとの（固有の）立場なのである。そういう意味で、それは、伝記者本来の立場である（例えば、ギリシアの昔、「伝記」が、弔辞、頌徳文、種々の文学作品、歴史叙述等から独立して始めて世に現れた際の「伝記」の筆者の立場は、基本的には、これと同類のものであったに違いない<sup>(1)</sup>）。

してみると、「自己目的・自足的伝記」の実例は、即ち「伝記者本来の立場」で書かれた伝記、そういう意味で「本来の伝記」の実例といつてよい。<sup>(2)</sup>

2. さて、この様に、伝記者本来の（固有の）独立した立場が存し、その立場が、他種の「目的」、「好み」、「狙い」等と結合した伝記の筆者や、ひいて他種の叙述の筆者の立場とは異なった、それらに対する伝記者独得の立場であ

り、且つ、その独得の立場で書かれた伝記(「本来の伝記」)の実例が存在するということは、即ち、「伝記」というものが、生来、一般に他種の「目的」「好み」「狙い」等と結合した叙述とは、種的に異なった、人間精神の独立した独得の所産であること、換言すれば、「伝記」というものが、人間精神に対して、他種の叙述とは種的に異なった独立した独得のかかわりをもつことを意味する。<sup>(3)</sup>

「自己目的・自足的伝記」の実例は、その「独得のかかわり」を体现しており、「独得のかかわり」の存在の証しである。

だとすれば、われわれは、逆にその「自己目的・自足的伝記」の実例を手掛りとし、それを分析することによって、その「独得のかかわり」が如何なるかかわりであるかを究明することができるであろう。

3. ところで、小論第一章で提起した「本来の伝記に関する基本的問い」は、「『伝記』の生れ(人間精神から「伝記」は如何にして生れたか)」、「『伝記』の存在理由(人間精神に対して「伝記」はどのような意味をもつか)」、「人間にとって『伝記』は何であるか——」等、要するに、本来の「伝記」と人間精神との「独得のかかわり」を問うものに他ならぬ。<sup>(4)</sup>

してみると、その問いを解明するには、前述の様に、その「独得のかかわり」を体现している「本来の伝記」の実例(「自己目的・自足的伝記」の実例)を手掛りとするのが適当と思われる。

結局、「自己目的・自足的伝記」の存在が確認され、その実例が見出されたということは、窮極的には、「本来の伝記に関する基本的問い」を解明するための有力な手掛りが見出されたことを意味する。

「手掛り」は他にもあるかも知れないが、前述の様に、「自己目的・自足的伝記」の実例は、即ち「本来の伝記」の実例であるから、それを手掛りとするのが、「本来の伝記に関する基本的問い」を解明するための正当な手順であろう。

準備はととのった。われわれの次の課題は、以上にその存在を確認し、その特徴を示した「本来の伝記（「自己目的・自足的伝記」）」の実例を手掛りとして、小論の窮極の問題であった（第七章3節、第一章4節参照）「本来の伝記に関する三つの基本的問い」を解明することである。

——未完——

## 註

### 九

- (1) 前出、『ベートーヴェンの生涯』、12—13頁。
- (2) 同上、12頁。
- (3) 「信仰の証し」が、主人公そのひとに対する共感（出逢い経験）の確認、表明になるのは、この場合の「信仰」が、「人間（主人公）に対する人間的信仰」であるからである。
- (4) ロランが、『ベートーヴェンの生涯』を「救済者に対する感謝の歌」と呼んだのは、一つには、ここにあげた希いの不可避性、直接性（他の「目的」、「狙い」等が介在しないこと）を示すためであろう。
- (5) 「出逢い」という言葉は、いろいろな意味で使われるが、ここで「出逢い」というのは、小論八章6節に述べた様に、「ひとが、他のひとに逢ってその全人を以てそのひとを感銘し、全人をあげてそのひとに傾倒すること」を指す。その様な独得の人間関係を意味する。  
さて、その様な「出逢い」経験から、その「出逢い」を確認したい、更には、出逢ったそのひとを他の人々にも伝えたいという希いが、出逢った当事者におこることは、ここに述べた（後述参照）通りであるが、その「出逢ったひと」の「伝記を書く」のは、当事者が右の「希い」を達成するための一つの途にすぎない。  
また、いうまでもないが、「右の様な希い」を達成するために伝記を書くのは、「本来の伝記者」の場合であって、すべての伝記者がこの様な希いから伝記を書くわけではない。むしろ、殆どの伝記は、それとは異なった「目的」、「好み」、「狙い」によって書かれることは、小論三章一七章の探究によって確認した通りである。
- (6) ロマン・ロラン研究者によると、ロランの社会主義への関心は、1880年、彼がヴィクトル・ユゴーに会って感銘して以来昂まり、1893年9月の日記には、ロランは、「社会主義の啓示が私の内へ入りこむにつれて大きな喜びが私の内に湧きおこる」、「現代ヨーロッパの社会、芸術をおびやかしている死から逃れる希望があるとすれば、それは社会主義のなかにある。」と記しているという（前出、新村 猛、『ロマン・ロラン』、90頁）。
- (7) 前出、『ベートーヴェンの生涯』、194—195頁。

- (8) 片山敏彦氏によると、ロランは、ベートーヴェンの音楽が与える啓示は、「準福音的な力」であるといい、晩年のロランは、この自分が受けた啓示を人々に伝えるという使命を自覚して、「誇らしいと共に謙虚であった。」という(前出、片山、『ロマン・ロラン』、190頁)。
- (9) 「類比的」といえば、「出逢い」におけるロランの心情は、むしろ信仰者の心情(自分が信仰する神を人々にも伝えねばならぬという心情)にちかいというべきか——。ロラン自身もそう考えていた様である(後述第十章参照)。
- (10) ロランがベートーヴェンそのひととの出逢いによって体験したものは、元は教訓ではなかった。しかし、それから20年余、その「体験したもの」は、ロラン自身の心情においても教訓に変貌してしまう。25年後に書かれた「ベートーヴェンへの感謝の言葉」で、ロランは次の様にいう。「私は同時代の凡ゆる師達からよりも、一層多くベートーヴェンから教えられて来た。」それは、「ひとり芸術家にとってばかりでなく、凡ゆる人々にとっての高い教訓である。」(前出、『ベートーヴェンの生涯』、165頁)。
- (11) 前出、『ベートーヴェンの生涯』、12頁。
- (12) この様なものとして、「第二の希い」は、一見あい似た、(そのために屢々混同される)『ジャン・クリストフ』を書いたロランの希いとは、生れも質も異なる。ロラン自身この両者の相違を『ジャン・クリストフ』の序文に述べている(前出、『ジャン・クリストフ』、12—14頁参照)。
- (13) 「伝記(Biography, Biographie, —Biographia)」という言葉は、もとギリシア語の「人の生涯を記す(bios-graphein)」に由来するという。厳密にいうと、ギリシアでも「伝記」を意味する“Biographia”という表現は、紀元後5世紀末に初めて出現したもので、それまでは、「伝記」を現すのに、ただ「生涯(a life, the course of life)」、「生活様式(manners of living)」を意味する“Bios”という言葉が使われたという(前出、『古典古代における伝承と伝記』、3頁、Vgl. Greek-English Lexicon, Oxford; Longmans English Larousse)。
- (14) この際、「ベートーヴェンの生涯を記す」ことは、彼との「出逢いを確認すること」と不可分で、そのことを内含している。だから、「出逢いを確認したい」という筆者の希いを、もし「目的」と呼ぶなら、それは「生涯を記す」ことに含まれた内在目的であって、その外にある所謂「目的」とは区別せねばならぬ。
- (15) 「人の生涯を記すこと」の外に出ることなく、伝記を書くことそのことにこめられたロランのこの様な希いは、ギリシアの昔、頌徳文、抒情詩、叙事詩、悲劇喜劇、歴史叙述等々から独立して、ただただ主人公への直接の関心から始めて「伝記」を書いた人々が、そこにこめた深重な、独得の希いにちかいのではないか——。
- (16) 尤も、この様にいうことができるのは、『ベートーヴェンの生涯』を書いた際の筆者ロランの主たる希いを、その元の姿と真相においてみる限りでのことである。実際には、ロランの「希い」には、主たる希いの他に、他種の希いが混入して

いるし、また、先述の様に、主たる希いも、種々の影響によって変貌している。当然、伝記の叙述内容にも不純な要素が含まれる。してみると、現実の『ベートーヴェンの生涯』を完全に(純粋に)自己目的・自足的であるということはできないかも知れぬ。『ベートーヴェンの生涯』の叙述内容から「そうはいえない」証拠をあげることは容易であろう。

十

- (1) 前出、『ベートーヴェンの生涯』、12頁。
- (2) 同上、18頁。
- (3) ロランの少年時代からの親友アンドレ・シュアレスは、ベートーヴェンに対するロランの独得の心情に関して次の様に証言する。「福音書を書く様な態度でベートーヴェンについて書く権利を私はロマン・ロランにだけ認容する。なぜなら、彼は実際その精神で生きているのだから」と(前出、片山、『ロマン・ロラン』、184—185頁。なお、小論第八章の註<57>参照)。

十一

- (1) 前出、『古典古代における伝承と伝記』、3頁、14—16頁、136—137頁参照。なお、九の註(12)参照。
- (2) 先述(九の註<16>)の様に、この様にいうことができるのは、『ベートーヴェンの生涯』を書いた際の筆者ロランの主たる希いを、その元の姿と真相(生の姿)においてみる限りでのことである。実際には、ロランの希いには、他種の希いが混入しているから、現実の『ベートーヴェンの生涯』は、筆者の希いにおいて、立場において、これを少なくとも「本来の伝記」の純粋な姿とはいえない。
- (3) 「伝記」を「文学の一ジャンル」、また「歴史叙述の一分枝」等とする今日の人人の見解(小論第一章註<11>参照)は、「伝記」と人間精神との、ここに述べた直接の、独立した独得のかかわりを見落したもので不当である(後述第十四、第十六章参照)。
- (4) この様に、「伝記」と人間精神との独得のかかわりを究明することは、即ち人間精神の特殊な様相(ひととひととの出逢いにおける特殊な様相)を解明することに他ならぬから、右の様な「独得のかかわり」の究明を目ざす小論は、文化哲学の一隅にして同時に、人間研究の一環でもあることは、第一章に述べた通りである(第一章、2節、4節及び後述第十四章、第十六章参照)。